

く、実験スペースは異なる分野の研究者に共同で利用されている。学生は分野間を自由に行き来し、興味のあることを追求して学識を豊かにし、別の分野の手法を通じて見識を深めることができる。

研究の進展を促進するため、研究者は自分が興味を持つテーマに応じて目印になる「タグ」を付ける。こうした「タグ」はコミュニケーションを図る際の目印となり、将来OISTに来ることを考えている教員や学生、研究者、起業家が特定の課題に関するエキスパートを見つけやすくなる。共通のテーマで結ばれるバーチャルなネットワークは、組成も解体も迅速・容易に行われる。相互に連結したコンパクトなキャンパスでは、研究者同士が容易に出会い、他の分野に関する知識を広げることができる。

この構造は、フロアレベル・研究棟レベル及び大学全体のレベルで見られ、類似の構造が階層を成す「フラクタルOIST」モデルを構成している。(p.18「研究室の構造」参照)。

OISTの経営幹部には、英国の免疫学者・ウイルス研究者であるプロボストのメアリー・コリンズ教授や、米国の素粒子物理学者である教員担当学監のミリンダ・プロヒッタ教授がいる。彼らは中核的な研究支援施設

を運営して学際的な環境を支える他、OISTの教員や研究者の採用を担当している。細胞シグナルユニット長である山本雅教授は研究ディーンで、研究戦略と学外との共同研究推進を担っている。また、大学院生は全員、構造細胞生物学ユニット長であるウルフ・スコグランド教授が率いる研究科の支援の下で学究生活を送っている。

本学の成長とともに、より多くの管理業務が研究棟単位で行われるようになり、シニアな研究者がそれを監督するようになる。また、研究面でのリーダーシップはテーマごとに決まるようになる。

OISTには、エンジニアリングサポートビル、クリーンルーム、画像装置、DNAシーケンサー、マリンサイエンス・ステーション、環境モニタリング・ネットワークなど、最先端の素晴らしい研究機器と施設がある。専門の研究者や技術者は、これらの共有リソースを運用・管理するかたわら多くの研究プロジェクトに参加している。OISTの「科学計算及びデータ解析セクション」は理論物理学から生態学まで幅広い研究を支え、研究者や情報技術者と協力して、研究のニーズに合ったハイパフォーマンスコンピューティング

**学内共同研究のネットワーク →**

このダイアグラムは学内の共同研究のパターンを表している。それぞれの節点は、研究分野ごとの共同研究による論文出版を表し、サイズは論文数を表す。距離の短さは共同研究の頻度が高いことを示している。

